【研究ノート】

「人称」を巡る二つの理論

――バンヴェニストとクルシル――*

江口　祥光

序

本稿は、エミール・バンヴェニスト[1]人称論を、ジャック・クルシル[2]が提案するそれと比較検討し、後者が前者のもつ射程の一つを明らかにするものであるということを示そうと試みる。

バンヴェニストは人称代名詞と結びついた「人称」の問題についていくつかの論文で言及し、一、二、三人称という人称代名詞の中で最初の二つのみが「人称」という名に値すると言う[3]。彼がこのように「人称」を規定する理由の 1 つは、それらが話しかける人物、話しかけられる人物という、対話を構成する二人の人物を指示するからだ[4]。

このようなバンヴェニスト人称論に真っ向から対立するような説が、バンヴェニスト亡き後 20 年の後、言語学者ジャック・クルシルによって提案される。曰く、二人称は否－人称であり、三人称の否－人称としての地位に留保をつける必要がある[5]。

クルシルがこの説を提示して以来、既に 15 年近くが経つが、未だ彼の説それ自体に対する検討も、バンヴェニストとの比較検討も本格的に行われていないのが現状[6]である。このため、エピステモロジックな観点[7]からこれら二つの人称論を検討することが必要であると思われる。

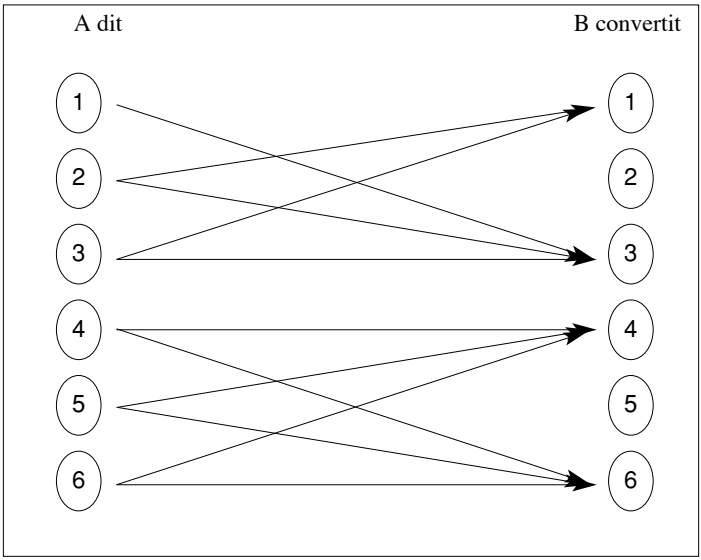
この検討において我々は、一見対立しているように見える二つの人称論が、実のところ似通った構想をしていること、そしてクルシルの理論がバンヴェニスト人称論へ新たな読みを提示していることを指摘することになるだろう。

議論は以下の手順で行なう。

1．クルシルの人称論がどのように構想されているのかを辿る。
2．クルシルの人称構想から4つの命題をとりだし、そのうちの2つが彼自身の説と整合性がとれないことを示す。
3．上記において検討されなかった2つの命題の内の1つが、バンヴェニストの「君」の構想の仕方と類似していることを指摘する。我々は、この「君」の構想から出発して、バンヴェニストが人称の中に持ち込む主体性概念というものを解釈しようと試みる。
4．残った命題が、これまであまり言われてこなかったバンヴェニスト人称論の一側面を照らし出しているのではないかということに言及する。

一章　クルシルの人称論

本章では、クルシルの人称論がどのように構想されているのかを確認する。少々唐突だが、まず彼が二人称と三人称に関して指摘を行なう際に拠り所としている図を紹介する。



この図をもとにクルシルは、二人称、三人称に関して次のような指摘を行なっている。二人称に関しては次のものであり、

> Le graphe des conversions montre que les indices 2 et 5 n'ont pas de représentation dans l'univers de B. En d'autres termes, ce sont des valeurs toujours converties qui n'ont pas de statut propre. « tu » n'est pas une position pour B. En clair, c'est celui qui dit « je » qui dit « tu », mais ce « tu » n'existe que dans la parole de celui qui parle : il n'a pas de statut comme valeur propre dans l'espace du dialogue. On en conclut que la « seconde personne » n'est pas une personne contrairement à ce que Benveniste semble défendre, mais une fonction d'appel convertible, c'est-à-dire un code phatique. (*LINX*, numéro spécial, 1997, p.233)

三人称に関しては次のものだ。

> A propos de l'indice 3 qu'on s'accorde avec raison à considérer comme non-personne, on doit néanmoins noter la réserve suivante inscrite dans le graphe des conversions. Il existe un cas où 3 est converti en 1 par B. Exemple : A dit 3 « la nuit, il est musicien ». Si c'est de lui dont on parle, B convertit 3 en 1 qu'on paraphrase « la nuit, je suis musicien ». Dans ce cas, 3 est convertible en une personne sujet. En tout état de cause, la question de la définition de l'espace intersubjectif reste obscure tant qu'on ne l'étudie que du point de vue de l'énonçant sans la mettre en rapport, dans un cycle dialogique, avec le point de vue de l'autre qui écoute. (*LINX*, numéro spécial, 1997, p.234)

さて、クルシル理論の根幹となっているものを急ぎ足で紹介したが、このままでは理解しがたいと思われるので、彼がいかにして最初の図へと至るのかを辿ってゆこう。この道程は三つの段階から構成されている。一段階目は、彼が「指標（=Indices）」と呼ぶ数詞を人称代名詞に割り振ることからなっている。これは、一人称単数代名詞に数詞「１」を割り当てることから始まり、三人称複数代名詞に数詞「６」を割り当てることから成り立っている。代名詞と指標とよばれる数詞の関係をまとめれば次のようになる。「私」＝「１」：「君」＝「２」：「彼」＝「３」：「我々」＝「４」：「君たち」＝「５」：「彼ら」＝「６」

クルシルによれば、このように人称代名詞に数詞という「指標」を当てはめ

るメリットは、各固有語において様々な統辞論的、形態論的、語用論的価値をもつ代名詞から、一般的価値を引き出せるようになることだ。例えば、フランス語では一人称を表す形態に、少なくとも« je , me, moi » という三つのものがあるが、彼の方法をもちいれば、これら三つの形態がそれぞれにもつ統辞論的・形態論的差異を捨象して、指標「1」のみでそれらを表すことが可能となる。

この一段階目の手続きに続いて、クルシルは、指標が「指示的な意味論価値(= valeurs sémantiques référentielles)」をもっていることを告げ、それらの例を枚挙している。これが二段階目の手続きに相当する。以下に引用しておこう。

> On constate en effet que tout ce qui compte, tout ce dont on peut parler, tout objet quelle que soit sa sorte, tout ce qui peut se désigner, se compter, se penser, se prédique sous un rang de personne verbale. « Les fleurs », c'est {6}, les objets sur la table, c'est {6}, « vous, mesdames et messieurs », c'est {5}, « vous et moi », c'est {4}, l'instituteur de mon enfance, c'est {3}, le cheval imaginaire « Pégase », c'est {3}, la définition du triangle rectangle, c'est {3}, « mon cher Alfred… », c'est {2} et « moi qui parle », c'est {1}. (*LINX*, numéro spécial, 1997, p. 229)

こうして「指示的な意味論価値」を担った指標 1 ― 6 は、指示的世界の全てをカバーする。言い換えれば世界－想像的可能世界も含めた－の諸対象は 6 つの人称代名詞（指標）でもって指示可能だということだ。

さて、最後の手続きへと移ろう。クルシルは、語り手 A から発される指標は、聞き手 B によって転換されて把握されると述べる。

> Une position émise A (1 ou 2 ou 3 ou 4 ou 5 ou 6) ne peut pas être considérée comme transmise comme le suggère le schéma classique de l'information. Pour être saisie, cette position doit être convertie par B. La conversion s'effectue selon des règles préétablies notées dans la table ci-dessous. L'application de ces règles de conversion s'inscrit sous le contrôle d'une fonction différentielle de « prise en compte » selon laquelle les indices émis par A doivent être convertis par B selon deux modes : soit par inclusion soit par exclusion du sujet qui compte. Cette fonction correspond au code d'entrée du dialogue. Exemple : quand A dit (4) « nous, les nobles nous portons l'épée », B, s'il n'est pas noble, convertit 4

en 6 qui se paraphrase en « eux les nobles, ils portent l'épée ». Si B est noble lui aussi, il convertit 4 en 4 qui se paraphrase « nous les nobles nous portons l'épée ». (*LINX*, numéro spécial, 1997, P. 231)

Table des conversions

A → B	A → B		A → B	A → B	
1° → 3°	je → lui	B décompté	2° → 1°	tu → moi	B compté
2° → 3°	tu → lui	B décompté	3° → 1°	lui → moi	B compté
3° → 3°	lui → lui	B décompté	4° → 4°	nous → nous	B compté
4° → 6°	nous → eux	B décompté	5° → 4°	vous → nous	B compté
5° → 6°	vous → eux	B décompté	6° → 4°	eux → nous	B compté
6 → 6°	eux → eux	B décompté			

（*LINX*, numéro spécial, 1997, P. 232）

上記引用文で、クルシルは語り手によって発された指標が、聞き手によって「包含（=inclusion）」あるいは「排除（=exclusion）」という二つのモードに応じて転換されると言うのだが、これを決める基準が示されておらず、例として挙げられている指標 4（複数形）に関しては、聞き手の「属性」をもとに包含/排除が行われている。もしこのやり方が単数形にも適用されるのであれば、1 → 1 という線が引かれてしかるべきだが、表の中にそれは無い。では、単数形の包含/排除を決める基準は何か。このやり方として挙げられている例は、先ほど引用した三人称に関するもののなかにある。もう一度それを見ておこう。

Exemple : A dit 3 « la nuit, il est musicien ». Si c'est de lui dont on parle, B convertit 3 en 1 qu'on paraphrase « la nuit, je suis musicien »[8]. (*LINX*, numéro spécial, 1997, p.234)

語り手 A によって用いられた三人称が、もし B について語っているのであれば、即ち、B を指示しているのであれば、B はこの三人称を一人称へと変換するとある。つまり、聞き手にまわっている各主体が、話し手によって発された代名詞によって指示されているか否かで、包含/排除がなされるということ

だ。単数形に関してはこのような代名詞の指示機能にもとづいて、複数形[9]に関しては、聞き手の属性にもとづいて、クルシルは、語り手 A から聞き手 B への人称代名詞の移転の可能性が書き込まれた先程の図を引き出し、それを拠り所としながら二人称、三人称に関する指摘を行なっているということになるだろう。

二章　二人称「君」と三人称「彼」：人称あるいは否ー人称？

一章において、クルシルがどのように矢印状の図を提示するに至るのか、そしてまたその図から引き出す二人称、三人称に関する指摘を確認した。これらの指摘を四つの命題にまとめ、検討してゆこう。

〈クルシルの指摘〉

1．指標 2（二人称単数）、指標 5（二人称複数）は、B（聞き手）の中に表象をもたない。
2．二人称「君」は、語る者の発話の中にしか存在しない。
3．二人称は、転換可能な呼びかけ機能、つまりファチックコードである。
4．三人称は、聞き手によって人称主体 1 に転換されうる。

クルシルが最初の命題で指摘するように、彼の図において語り手によって発された指標はどれも、聞き手側に記された 2 へと向かっておらず、この意味で聞き手において指標 2 の表象がないと言えるのだが、しかし、この指摘は、それを彼の行った「包含/排除」という操作と関連させて考慮するならば、それほど妥当性をもった議論ではないように思われる。この操作は、語り手によって発された指標によって、聞き手として想定された主体が指示されているか（包含）、否か（排除）に応じて、指標を 1 か 3 へと割り振ることから成り立っていた。この操作は次のようにまとめることができるだろう。

A ：包含／排除という操作に関するまとめ

1．　この操作において聞き手は「私」として設定されている。というのも、もし発された指標が聞き手を指示するならば、この聞き手はその指標を 1 ＝「私」へと変換するからだ。

2．　発された指標を分配する方法は、二分法的である。つまり、三つの単数代名詞は、この操作の際に二項（「私」＝包含＝指示されている／「否－私」＝排除＝指示されていない）に還元されている。

ここで、このA－2そしてそれをもとに提示される命題1（聞き手における表象2の不在）の関係を検討しておこう。A－2で行うような、三項からなるものを二項に還元するという操作を行なった後で、最初の三項の内の一項の不在を指摘すること（命題1）は説得力のある議論として成立するだろうか。このことをよりわかりやすく理解するために、クルシルの手続き（A－2から命題1への移行）に多少なりとも類似した例を想定してみよう。ここに、三つのワインボトルがあるとする。一つはボルドーとエチケットが貼ってあり、もう一つはブルゴーニュとあり、もう一つはエチケットの無いものである。これらを箱に詰めるとしよう。箱は二つしかなく、一つにはボルドーと書かれてあり、もう一つには何も書かれていない。最初の箱の中にボルドーの瓶を詰め、他の箱の中にブルゴーニュとエチケットの無い瓶を詰める。その後に、ブルゴーニュの瓶や箱がないと指摘することに、妥当性があるとは思われない。そもそもブルゴーニュと書かれた箱は無かったし、ブルゴーニュの瓶は何も書かれていない箱の中に納まっているからだ。クルシルの操作から明らかになること、それは、語り手によって発せられた指標1＝「私」が、「私」と想定された聞き手を指示することは無いということ、そしてそれゆえ、この発せられた指標1が聞き手にとって「否－私」として表象1以外のもの（つまり3）に配分されることなのだが、この過程によって、聞き手における表象2の有無を決定することはできないように思われる。この件に関して、二つのことを記しておく。

B：聞き手における表象2の不在という命題に関する指摘

1．　最初のものは、バンヴェニストの考え方に関わる。彼にとって、聞き手の中に表象2が存在する可能性はありえるように思われる。« Il faut et il suffit qu’on se représente une personne autre que « je » pour qu’on lui affecte l’indice « tu ». Ainsi toute personne qu’on se représente est de la forme « tu », (…) ». (*PLG 1*, p. 232)

2．　もしこの命題1を保持し、それでもって人称/否－人称を分ける基準

とするならば、このことはクルシルの説自体にいくつかの困難をもたらすことになる。

これからこのＢ－２に関して検討してゆくが、その前に、この表象２の不在を基準として人称／否－人称を分けた場合の結果を確認しておこう。つまり、表象２が不在であるゆえ、指標２＝「君」が否－人称であるならば、表象が存在している指標１＝「私」、指標３＝「彼」は、人称ということになるだろう。

〈聞き手における表象の在/不在をもとにした人称／否－人称の配置〉：

人称	否－人称
私・彼	君

さて、この命題１が問題を孕むのは、まずはクルシルの三人称に関する指摘（命題４）との関連においてである。そこでは、三人称が聞き手において一人称（人称主体）へと変換されることが強調されていた。もしクルシルがこの事実でもって、三人称を「人称」と考えているのであれば、人称／否－人称を決める基準は（先の聞き手における表象の有無に関するものを基準１とし、ここでの基準を２と表す）、発された指標が、聞き手において表象１へと変換されるか否かということになるだろう。彼の図をもとにしながら、この基準がもたらす結果を表にしておこう。

〈聞き手において表象１へと変換されるか否かをもとにした人称／否－人称の配置〉：

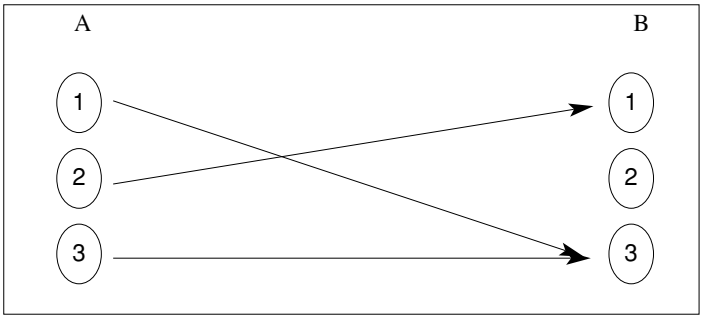
人称	否－人称
彼，君	私

上記二つの表の中にあらわれている結果を照合すると、人称代名詞の異なった二つの配置が出現する。このため、二つの基準を維持する事は困難だ。ただし、基準１だけを見るならば－そこでは聞き手における二つの表象（１，３）の意味合いが異なっており、さらには先ほど確認したように表象２が無いと断言できるものではないという二つの問題があるのだが－、二人称は否－人称で

あり、三人称の否－人称としての地位に留保をつけるというクルシルの説と合致しているのも確かだ。しかしながら、この基準１をもとにした人称代名詞の配置法も、聞き手の二つの地位－話しかけられている聞き手と話しかけられていない聞き手－を区別するならば、整合性のとれた説とはならないだろう。以下にクルシル風の矢印図をつくりながら、聞き手の二つの地位の区別がもたらす影響を確認してゆく。

ある語り手Ａが、聞き手Ｂに語りかける際の人称代名詞の転換の可能性が書きこまれた図を α として以下に示す。

図 α



クルシルの図が２→３そして３→１と矢印を引くのに対して、この図にはそれらがない。まずＡによって発された指標１の語りかけられている聞き手Ｂにおける転換について説明しよう。

もしＡが指標１を用いるならば、この記号はＡを指し、Ｂを指さない。言い換えれば、ＢにとってＡによって発せられた一人称代名詞は自らを指示しない。これによってＢはこの指標を排除し、３へと割り当てる。このことに関連して次のことを指摘しておこう。指標１は、語りかけられている聞き手においても、語りかけられていない聞き手においても３にしか転換されない。というのも、聞き手達にとって、他の誰かである語り手から発せられた一人称が、自らを指示することはないからだ。

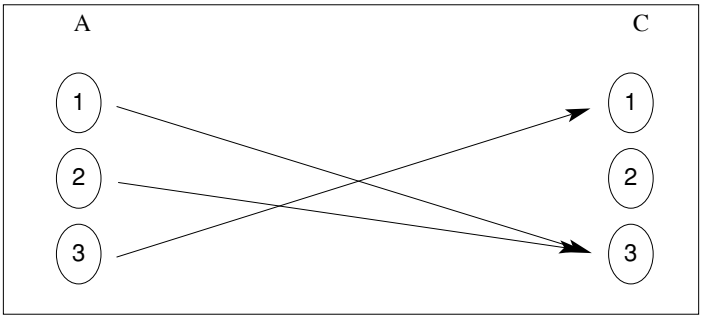
次に、指標２を問題としよう。もしＡがＢに話しかけながら二人称を用いる

ならば、この二人称はＢを指示する。つまりＢはこの記号によって指示されている対象だ。従って、Ｂはそれを１へと転換する。例：ＡがＢに次のように言う。「君は学生か？」－Ｂの返答は次のものだ。「私は学生だ」「私は学生ではない」

次に、指標３である。もしＡが三人称を用いてＢに話しかけるのであれば、この記号はＢ以外の人物を指示する。こうしてＢはこの記号によって指示されておらず、クルシルの用語でいえば「包含」されていないことになり、彼はそれを３へと転換する。例：ＡがＢにＣについて言及する。「彼（＝Ｃ）は音楽家だ。」これに対してＢは「（そうか）彼は音楽家なんだ」や、もし彼がＣの属性についての情報をもっているのであれば、「彼は音楽家ではなく画家だ」等というように変換する。いずれにせよ、語りかけられている聞き手において指標３が１に転換されることはない。

続いて、会話の場に参加しているが語りかけられていない聞き手のもとでの転換をみよう。このために、語り手Ａ、彼が語りかけている者Ｂ、語りかけられていない聞き手Ｃという人物を仮定しておく。以下にこの参加者Ｃのもとでの人称代名詞の転換を表した $\beta-1$ を示す。.

図 $\beta-1$



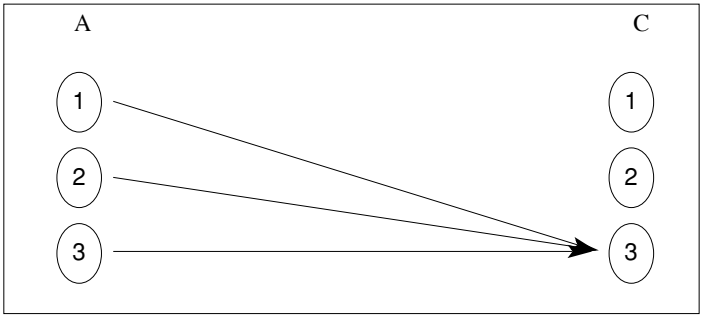
発された指標１が、聞き手において３にしかならないことは既に確認したので、指標２から見てゆこう。クルシルが２→１と線を引くのに対して、Ｃのもとで２が１になる可能性はない。というのも、二人称代名詞を用いてＡはＢ

に話しかけているのであり、C に話しかけていないため、この記号が C 自身を指すことはない。こういうわけでそれは 3 に転換される。

指標 3 に関しては、A が C について言及するか否かに応じて二つの可能性がある。図 $\beta-1$ で、我々は A が三人称を用いて C について語るケースを想定している。この場合、指標 3 は C のもとで 1 に転換される。なぜならそれは C にとって彼自らを指示しているからだ。例を引いておこう。：A が C を指差しながら B に向かって「彼は音楽家だ」と言う。C はこの代名詞「彼」を「そうだ、私は音楽家だ」あるいは「私は音楽家ではない」等と変換する。

上記において A が三人称を用いて C に言及するケースについて記したが、もちろんそうでないケースも存在する。例えば、B に話しかけながら、A は彼にこの三人からなる会話の場にいないある人物 D の写真を見せ、この D について語る場合などだ。このような状況において、C は発された三人称代名詞によって指示されていないので、彼がそれを 1 に換えることはない。こうして、このケースでの C における指標 3 は 3 にしか転換されない。そこで図 $\beta-1$ を、語りかけられもせず、言及されもしない C の転換例として β—2 へと変更して示しておく。

図 $\beta-2$



ここまで、聞き手の二つの地位に応じた転換を確認した。このことをわかりやすく表すために、聞き手別に基準 1，2 を適用させた表を記しておこう。

		語りかけられている聞き手	言及される聞き手	語りかけられも、言及もされない聞き手
基準１	人称	私、彼	私、彼	彼
	否－人称	君	君	私、彼
基準２	人称	君	彼	-
	否－人称	私、彼	私、君	私、君、彼

基準１内部においても基準２内部においても人称／否－人称を分ける配置が一貫していないことが見てとれる。言い換えれば、各基準はその内部に困難を抱えているということだ。こうして、クルシルの指摘１と４が一貫性ある代名詞の記述には適さないことが理解されるだろう。とはいえ、彼の４つの指摘のうち、バンヴェニストと比較するうえで重要なものは２,３であると我々は考える。以下にこの件について考察してゆこう。

三章　二人称「君」の性質：主体性概念との関わり

本章では、クルシルの命題２（二人称「君」は、語る者の発話の中にしか存在しない）を取り上げる。

このクルシルの指摘は、バンヴェニストにおける二人称「君」の構想の仕方、そして人称と呼ばれる「私・君」の内部に導入された主体性/否－主体性という分割を再考させるように思われる。バンヴェニストが「君」を特徴づけようと試みているのは、「ことばにおける主体性」論文の中である。

> Je n’emploie *je* qu’en m’adressant à quelqu’un, qui sera dans mon allocution un *tu*. C’est cette condition de dialogue qui est constitutive de la personne, car elle implique en réciprocité que je deviens *tu* dans l’allocution de celui qui à son tour se désigne par *je*. (*PLG 1*, p.260)

引用文中、バンヴェニストは「君」であることを二つの段階に渡って説明している。第一段階において、彼は自らを語り手とみなし、誰かに語りかけてい

ることを想定しながら、「私」として語り手役を演じている。そしてこのバンヴェニストの発話の中で彼の目の前にいるこの誰かは「君」となっている。第二段階において、今度はこの誰かが「私」として、語り手の役を演じ、バンヴェニストに話しかけていることを仮定する。そしてこの誰かの語りかけの中でバンヴェニストは「君」となっている。つまり、二人の主体－バンヴェニストと彼の目の前にいると想定された人物－が「君」とみなされるのは語り手の発話の中においてである。クルシルにとってもバンヴェニストにとっても、「「君」はパロールあるいは語りかけの中にある」ということになるだろう。言い換えれば、対話を行う主体達は「君」ではなく、「私」であるということだ。

我々によれば、このような考えが、バンヴェニストをもって人称を分割する主体性概念というものを導入させることへ至ったように思われる。彼は、「動詞における人称関係構造」「ことばにおける主体性」という両論文においてこの概念を提示する。それは、人称という二項「私・君」をいくつかの特徴に応じて「主体性・否－主体性」に分けるものであり、二つの論文において共通している二項の特徴は次のものである。「私・君」－「内的・外的」－「超越的・（非超越的）」最初の特徴付け（内的・外的）を、上で見てきたバンヴェニストのことばを踏まえて考えてみよう。対応関係は明らかだ。「私」は「君」に対して「主体的」で「内的」だ。なぜなら、「私」のみが各主体になることが可能であり、主体の内部に位置することができるからだ。逆に、「君」は主体になることができず、主体の外部に位置している。恐らくこのような理由で、バンヴェニストは主体性概念というものを人称関係の内部に導入し、「私・君」を「内的・外的」として特徴付けたのではないだろうか。

「私」に付与された「超越性」という性質に関しては、この語をどのように定義するかによって異なる解釈が提示可能なように思われる。我々はこの語に与えられた二つの意味を参照しよう。最初のものは、哲学者ステファヌ・モーゼがバンヴェニスト論において提示する現象学的意味だ。彼は論文「エミール・バンヴェニストと対話の言語学」においてバンヴェニストの言う超越性という概念を次のように解釈している。

Il faut entendre ici le terme de « transcendance » au sens d'« antériorité logique », sans

doute aussi de « prééminence », et peut-être même au sens phénoménologique de « pouvoir constitutif ». (Revue de métaphysique et de morale, 2001, p. 513)

この現象学的な意味での「構成する力」というものに依拠し、それをバンヴェニストの言う「私・君」関係に突き合わせるならば、それらの間の対応関係を認めることができるだろう。これまで確認してきたように、主体となり「君」を述語付け、従って、「君」をそのようにして構成するのは「私」である。言い換えれば「君」は「主体＝私」によって構成された発話の中にしかその存在をもたないため、構成する力をもつことはできないのだ。こうして、このモーセの提示する現象学的意味においては、「私」は「君」に対して構成する力をもち、それゆえ「君」に対して超越的となるだろう。

しかし、超越性（＝ transcendance）という概念を通常の意義において捉えるならば、「私」と「君」の関係は反転する。この通常の意義としてロベール辞典に記載されてあるものを引こう。

Qui est au-delà de l'expérience et fait appel à un ordre de réalités supérieur, à un principe extérieur et supérieur. (« Dictionnaires Le Robert »)

ここでは、経験の外側にあるものが超越的であると定義されている。これまでに見てきたように、バンヴェニストにとって「君」は、主体＝「私」が経験可能な領域に属しておらず、それは彼の外側にある経験不可能な領域に属していた。従って、この通常の意義において超越的なものは「私」ではなく「君」ということになるだろう。

さて、ここまでクルシルの指摘２とバンヴェニストにおける「君」の構想の共通性を確認し、そこからこの後者における主体性概念に解釈を提示した。クルシルの４つの指摘のうち残った１つ（指摘３）を見ておくことが必要だ。

四章　ファチックコード [10]

ここで、クルシルの指摘 3 をもう一度、喚起しておこう。それは、二人称

が「転換可能な呼びかけ機能、つまりファチックコード」をなしているというものだ。このクルシルの二人称「君」が「転換」されるという指摘は、本稿で確認したあらゆる図にたいして当てはまっており、それゆえ、異論の余地のないものである。ただし、クルシルの指摘 3 にたいしては、次のように問うことができるだろう。なぜ、転換されるという性質が、ファチックという性質へ結びつくのか。クルシルの論文中に、この問いへの明確な答えを見出すことはできないが、ヤーコブソンが「ファチック機能」として定義したようなファチック概念は、クルシルの指摘に根拠を与えるように思われる。以下にその定義を引用しよう。

> Il y a des messages qui servent essentiellement à établir, prolonger ou interrompre la communication, à vérifier si le circuit fonctionne (« Allo, vous m'entendez ? »), à attirer l'attention de l'interlocuteur ou à assurer qu'elle ne se relâche pas (« Dites, vous m'écoutez ? » ou, en style shakespearien, « Prêtez-moi l'oreille ! » - et, à l'autre bout du fil, « Hm-hm ! »). Cette accentuation du *contact* – la fonction *phatique*, dans les termes de Malinowski – peut donner lieu à un échange profus de formules ritualisées, voire à des dialogues entiers dont l'unique objet est de prolonger la conversation. (*Essais de linguistique générale 1*, p. 217)

つまり、「ファチック機能」とは、聞き手の注意を惹き、聞き手に影響を与えようとする表現のことである。このようなファチック機能の特徴を鑑みるならば、なぜクルシルが「君」という語をファチックコードとしたのかが理解されるように思われる。というのも、発された記号「君」は、それを聞き手が理解するために「転換」を強要するからだ。聞き手の脳の認知的側面は、この転換という作業によって必然的に影響を及ぼされることだろう。このような意味において、「君」は最もファチックに適した表現であるのだ。ところで、ここで指摘せねばならないのは、このように聞き手に転換を強要させる語は、「君」だけではないということだ。語り手から発せられた「私」もまた、聞き手において常に転換されねばならない記号である。ある言語に無数にある記号の内、「私・君」のみが常に転換される価値を持つ。そして、これら二つの語はバンヴェニストが「人称」と呼ぶものに他ならない。二つの「人称」記号、「私・君」は、同時にまた「ファチック」記号でもあるとクルシルと共に言えるので

はないだろうか[11]。

結論

これまでの検討を振り返って結論としよう。我々はクルシルの二人称、三人称に関する指摘から 4 つの命題を取り出した。

命題 1（聞き手における表象 2 の不在）を巡ってクルシルとバンヴェニストの間には態度の違いがあるにもかかわらず、命題 2（二人称が発話の中にあること）に関して、両者は意見を同じくしていた。このことは、クルシルの聞き手の立場に立つ人称論が一見したところバンヴェニストのそれと対置されるようなものでありながら、根底のところで、バンヴェニスト的な発想によって貫かれていることを示唆しているように思われる。この連続性はクルシルが最初の操作（包含／排除）を行うに際して、聞き手を「私」と捉えた瞬間から始まっていたのではないだろうか。

命題 3（（転換可能な価値を持った二人称がファチックであるということ）に関しては、クルシル人称論は、聞き手の立場からのみ語ることのできる「転換」という価値に注目することで、バンヴェニスト人称論の隠れた一側面を照らし出すことに貢献している。

命題 4（三人称が聞き手において表象 1 に変換される）に関して、クルシル人称論は、聞き手の異なる地位を考慮していないゆえに一貫性に欠ける議論になってしまっているのだが、聞き手の地位を区別することからなるバンヴェニスト人称論は、クルシル人称論にそのような困難から抜け出す糸口を与えている。

このように振り返ってみると、二つの人称論は、外見上の対立関係に反して、互いに互いを補完しあう相補関係にあると言うことができるだろう。

＊本稿は、Paris-Est Marne-la-Vallée 大学において開催されたコロック：« Les théories de l'énonciation : Benveniste après un demi-siècle », (L. Dufaye et L. Gournay (Organisateurs), les 24 et 25 novembre 2011) において筆者が発表した原稿：« Un dialogue concernant la

notion de « personne » : Emile Benveniste et Jacques Coursil » を和訳し、加筆、訂正したものである。

注

(1) バンヴェニストからの引用は *Problèmes de linguistique générale 1, 2* を *PLG 1* あるいは *PLG2* と略したうえで、ページ数を表記する。

(2) 本稿でのクルシルからの引用は彼の論文 « La topique du dialogue ou comment assigner au sujet, son lieu » (*LINX*, numéro spécial, 1997)に限っている。引用後に、雑誌名、号名、出版年、ページ数を表記する。

(3) バンヴェニストはいくつかの論文に渡ってこのように言っている。2 つのみ例を挙げておく。« la personne n'est propre qu'aux positions « je » et « tu » ». (*PLG* 1, p. 230) « Celle-ci [=la notion de personne] est propre seulement à *je/tu*, et fait défaut dans il ». (*PLG* 1, p. 251 鉤括弧は我々による補足)

(4) « Dans les deux premières personnes, il y a à la fois une personne impliquée et un discours sur cette personne. « Je » désigne celui qui parle et implique en même temps un énoncé sur le compte de « je » (…). A la 2e personne, « tu » est nécessairement désigné par « je » et ne peut être pensé hors d'une situation posée à partir de « je » ; et, en même temps, « je » énonce quelque chose comme prédicat de « tu ». Mais de la 3e personne, un prédicat est bien énoncé, seulement hors du « je-tu » ; cette forme est ainsi exceptée de la relation par laquelle « je » et « tu » se spécifient ». (*PLG* 1, p. 228)

(5) 次の二つの箇所をまとめた。« On en conclut que la « seconde personne » n'est pas une personne (…) » (*LINX*, numéro spécial, 1997, p. 233), « Réserves sur le statut de l'indice 3 comme non-personne » (*LINX*, numéro spécial, 1997, p. 234)

(6) ジェラール・デッソンがその著作「エミール・バンヴェニスト　ディスクールの発明」の注の中で、二人の立場についてわずかに触れ、バンヴェニストを擁護する立場からクルシルの説に批判を行なっている。しかし、デッソンの批判はクルシルの言っていることを的確に捉えていないように思われる。このことは注 9 においてまた触れる。

(7) エピステモロジックという語でもって我々は、「ことばと諸言語に関する諸思想の歴史」の著者達が « l'épistémologie normative » と呼ぶものを指している。« l'épistémologie normative, (…) : elle essaie d'examiner comment fonctionne une

méthode, ce qu'est un raisonnement grammatical bien conduit ». (*Histoire des idées sur le langage et les langues*, p. 31)

(8) デッソンが、批判を提出しているのはこの例に対してだ。« Bien des critiques de la position de Benveniste proviennent d'un déficit de compréhension de la logique énonciative. Ainsi, le fait qu'un locuteur puisse dire, en parlant de lui-même : « la nuit, il est musicien » ne permet pas d'inférer que la troisième personne « est convertible en une personne sujet ». Dans cet exemple – en supposant que la référence de *il* soit clairement identifiable – rien n'a été « converti ». Il s'agit d'un simple problème de représentation qui peut affecter aussi bien la personne allocutée (« *tu* ») : « Alors, il veut quoi, le monsieur ? » ». (Dessons, 2006, p.167) デッソンは、« le fait qu'un locuteur puisse dire, en parlant de lui-même : « la nuit, il est musicien » » という指摘を行なっているが、クルシルは、「語り手が自身について語りながら」とは言っておらず、語り手が三人称を用い、この三人称でもって「聞き手 B について語っているならば」と言っている。デッソンの解釈には誤解があるように思われる。

(9) 以下の議論においては、人称代名詞単数形の問題に話を限っておく。この理由としてクルシルは、バンヴェニスト人称論における複数形の問題に対して、批判も留保も提示していないということを挙げる。

(10) バンヴェニストは、マリノフスキーの提示する « communion phatique » という概念に関心をもち、論文「言表行為の形式的装置」の一部をこの概念の検討に割いている。とはいえ、この検討は完了しておらず、« L'analyse formelle de cette forme d'échange linguistique reste à faire. » (*PLG* 2, p. 88) という言葉で締めくくられている。この論文はバンヴェニスト最後の論文であるため、彼がどのようにこの概念を捉えていたかに関して未だ多くの謎が残っていると言えるだろう。このような状況に対してイレーヌ・フェノグリオ（2011）は、「言表行為の形式的装置」に該当する手稿を分析しながら、バンヴェニストの思考の軌跡を明らかにしようとしている。

(11) 末永朱胤は論文「人称論としてのバンヴェニスト－バイイ、オースティンと対照して」（2011）において、バイイ、オースティンの言語理論とバンヴェニストの人称論を比較検討しながら、この後者と「働きかけ」としてのファチック機能との強い関連性を指摘している。

【引用文献】

Benveniste Émile, 1966, *Problèmes de linguistique générale 1*, Paris, Gallimard.

Benveniste Émile, 1974, *Problèmes de linguistique générale 2*, Paris, Gallimard.

Colombat Bernard, Fournier Jean-Marie, Puech Christian, 2010, *Histoire des idées sur le*

langage et les langues, Paris, Klincksieck.

Dessons Gérard, 2006, *Émile Benveniste, l'invention du discours*, Paris, In Press.

Fenoglio Irène, 2011, « Déplier l'écriture pensante pour re-lire l'article publié. Les manuscrits de « L'appareil formel de l'énonciation » d'Emile Benveniste », In Brunet, E. et Mahrer, R. (éd.), *Relire Benveniste*, Louvain-la-Neuve : Academia, p. 263-304.

Jakobson Roman, 1963, *Essais de linguistique générale 1*, traduit par Nicolas Ruwet, Paris, Minuit.

Mosès Stéphane, 2001, « Émile Benveniste et la linguistique du dialogue », *Revue de Métaphysique et de Moral*e, 2001/4, n°32, p.509-525.

末永朱胤、2011、「人称論としてのバンヴェニストーバイイ、オースティンと対照して」井原鉄雄中央大学教授退職記念論文集、井原鉄雄中央大学教授退職記念論文集編集委員会